



写真：テムズ川（ロンドン）

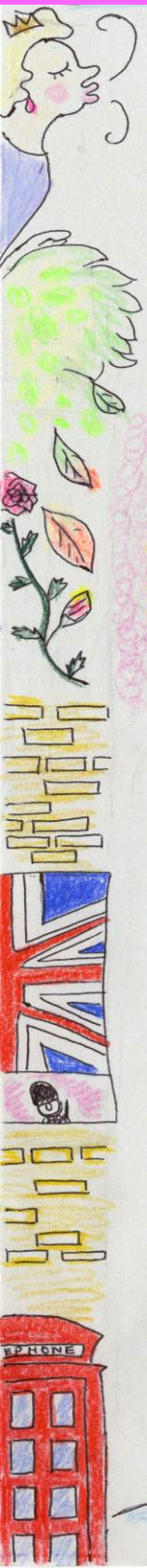


# あの日のあの川 リレー日記 ～第1話～



あの日のあの川  
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。



## 第1話主人公 川合 君穂

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類4年 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：愛知県天白川)

## 「テムズ川～想像と記憶～」

いつのこと？：高校時代過ごしたイギリス生活

どこの川？：テムズ川

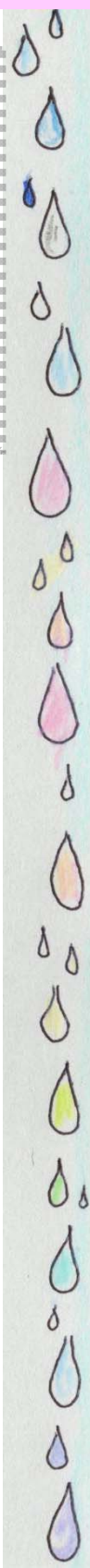
私には漠然とした「川はきれいなもの」という意識が、幼い頃からある。川はサラサラと流れ、春には薄紅色の桜を映し出す。夏には子どもたちの遊ぶ声が聞こえる場所となり、日差しを受けてキラキラと光る。青く澄んだ水は稲を育み、秋には赤トンボが飛び交って、冬には氷が薄く張る。古き良き里、稲作文化を背景に育った人間の持つイメージそのものであると思う。そんな名もなき川が私の心のふるさとを流れている。

理想はあるものの、私自身はそのような川に実際触れ合った記憶は一切ない。母校である中学校の近くを流れる天白川に、小学2年生の時授業の一環として入ったことがある。生物こそたくさんいたが、血を吸うヒルもいれば草もボウボウで近寄りたくなかった。それ以降、キャンプや旅行でも川には親しんでこなかった。

ならばどこから意識が形成されたのか。それは文学と、世の中に流布している風景写真付きカレンダーたるもののおかげだ。絵本や小説などは私の「川＝綺麗」の感覚を作り出し、カレンダーの写真も「こんなにきれいなせせらぎや川が、日本・世界にはある」ということを教えてくれた。文字から汲み取った想像の川と、写真家の赴いた存在する川が私の中では混ざり合った。そして完成したのが、幼いころの（そして今でも抱き続けている）川に対するイメージ・意識である。



では、いきなりだがテムズ川といたら人はどんな川を思い浮かべるのだろうか。





ある人は、映画「ハリーポッター」シリーズに出てきたシーンを思い浮かべたりするのだろうか。シャーロックホームズが活躍した場所を流れるその川は、小説などの影響で世界からの認知は高く、イギリスを代表する川だ。世界の人に「日本の川は？」と聞かれてもテムズ川を越す認知度はないだろう。

私は高校時代を4年間イギリスで過ごした。ロンドンから2時間離れた「バース (Bath)」という街の近郊で寮生活を送った。学校はまさに自然の中で、車がないと街には出られず、牛や馬がおり、キジもウサギもいれば、羊が時々校内を横切ったりした。バースはその名の通り「お風呂」である。昔ローマ人が温泉を作った場所だ。キツネ色の石でできた街並みも魅力も、私はロンドンに負けないと思っている。周辺を流れる川はとてもきれいだ。そんなこともあってか、まだ川の知識が乏しい私は、なぜかテムズ川もこれくらい綺麗だろうと思っていたのだ。関わる英国人は皆自然が好きで、国は自然の豊かさを象徴する「妖精」の発祥地でもあるのだから。

留学して2年目ようやくその姿を拝める日がやってきた。結果、失望。

今振り返ってみれば、当時なぜそれほどまでにショックを受けたのか私には分からない。規模の大きさを除いて、東京駅近くの神田川と同じような見た目の水質だと今でこそ思う。ただ、イギリス生活において私の周りには常に自然があり、お世話になった人も自然が好きだった。そのことから田舎ののどかな流れから、急に向き合ったテムズ川はなんとも衝撃だったのである。濁った水だった。海に近いせいもあったのだろう。それに、都市なのだからといえばそれで済むだろう。現に産業革命で国土の森を失い、見渡しの良い丘が広がるイギリスは、今でも当時の煤が建物から剥がれるせいか、一日過ごしただけで鼻の穴が真っ黒になった。19世紀のロンドンでは工場や家庭から出る石炭の煙で霧が白くなく、茶色だったようである。イギリスで紳士が黒ずくめの服装をしていたのは、もしかしたらその影響があったのかもしれない。空気が汚れば、水も同様だ。もしかしたらテムズ川の川底に当時の煤が今でも沈んでいるとも考えられる。

衝撃を除いて私がテムズ川で気に入ったところは、川の両岸のスペースがとても広く、ビックベンや、ロンドン・アイ、タワーブリッジなどまさに英国の歴史を物語る建物が見渡せることである。川岸の活用、その開けた景観を生かす、という面では見習いたいと思う。人口は日本と比べて少ないが、同じ島国でも「スペース」の美しさを表現する見せ方はやはり座布団2枚でも足りないだろう。

想像、理想と記憶。すべて人の中にあり、根を張り育ち、抽象化されていく。時にイメージは茂らせた想像の葉を、理想をいうものに美しく色づけさせる。しかし現実燃えるような紅葉を一瞬にして、カサカサと水気のない落葉へと変えさせる。

今を生きている子どもたちは川といったらどういうイメージを持っているのだろう。

今なら想像と理想は、実際目にしなくてもネットで一瞬にして育つ前に摘み取られてしまうのではないだろうか。しかし現実を見ても私の意識に揺らぎはない。私はテムズ川をよい先生として、記憶のエッセンスを優しく注ぎながら再び理想の芽を育てている。

人間は不可能だと思えたことを実現してきた。人間は空を飛び、どんなに離れていようとも顔をみて友人と話せる環境をつくり出した。だから思うのだ。私の意識の中の川はもっと身近に存在し得るのだということ。豊かな川を人々が心の中で、そして頭の中で抱き続ける限り、この夢は終わらない。そしていつか実現するだろう。今は夢物語でもいい。

現実につみとられてしまったならば、記憶からまた育ててゆけばいい。子どもたちが理想の川を描きつづける限り、理想は消えない。

私はこれからまたたくさんの人と川に出合っていく。そして行動し続けようと思う。

心のふるさとが本当の故郷となる日を夢見て。

(次は中前千佳さんにバトンを託します)

